

別添1 (様式1)

平成30年度 岡山県立津山高等学校 学校評価書

校長 菱川 靖 人 印

A 自己評価

I 評価結果(別紙)

II 分析・改善方策

今年度は、具体的な目標として次の5つをあげ、実践的に教育活動に取り組んできた。それぞれの目標ごとに次にまとめる。

- 1 「『深い学び』の形成」については、「発問等の工夫による思考力の育成」に焦点を当て、情報収集と啓発活動を行った。SSH 推進室と教務課企画係が中心となって、授業における展開の共有を呼び掛けた。特に SSH の開発目標として掲げている「Vision (先を見通す力・V), Grit (やり抜く力・G), Research Mind (探求心・R) の育成」を授業にも反映させるため、各教科の方向性を共有するよう授業観察をすすめた。また代表的な授業の取組を教務課企画通信を通じて共有することで、V・G・R の受け止め方の理解に努めた。具体的な授業展開の形や具体的な発問の方法など、今後研究が必要な点は残されているが、生徒の主体的な学びにつなげる各教科の工夫を共有することができた。次年度には、授業観察のポイントと具体的な発問、授業展開の方法を共有し、どの教科でも「主体的で深い学び」につながる授業展開になるように協働して進めていきたい。
- 2 「『べた』から『ポイント』へ」については、各年次団毎で生徒の自主性、主体性を育成する方向性をもって取り組んだ。1年次は、授業の開始・集会での集合などの時間管理を徹底し、集団としての動きには向上が見られた。また集団全体で多様性を認め受け入れる姿勢に成長が見られた。2年次は、学校の中心年次として、多くの生徒にリーダーシップを発揮する場面を設定し、学校祭、十六夜プロジェクト、課題研究発表会、四校連携講座などを主体的に取り組むことができた。3年次では、学習状況の記録や評価を通して学習の質向上とやり抜く力の育成を目指した。その結果として国公立前中後期合計で417名が出願(昨年比29%増)し、最後まで挑戦する姿勢を示した。それぞれの年次が生徒の特徴と課題を理解し、適度な負荷をかけながら挑戦をさせることで、生徒の成長を確認することができた。
- 3 「高大接続改革への対応」については、教務課企画係を中心として、進路課、各教科と協働して進めることができた。教務課企画係は、「企画通信」をメディアとして、教員相互に授業を取材し、主体的で対話的な深い学びにつながる各教科ごとの授業の共有に努めるとともに、大学入学共通テストに向けた情報を発信し、教員間での共有に努めた。国語科では、中堅研修教員と教職大学院で学ぶ教員が中心となり、OJT チームを組み、授業観の共有、公開授業の実施、研究協議、振り返りなどを通して、生徒が主体的に参加する授業構築に努めた。生徒個々が考える時間をつくる取組が今後に生かされるとともに、次年度は、他の教科でも同様の取組を広げることを目指したい。
- 4 「中高連携のさらなる推進」について、項目ごとにまとめた。
 - (1) 「切磋琢磨」の実践及び、一年目の成果と課題の検証として、1年次団は、成績推移に注目しながら検証を行った。年次発足当初、津山中学からの進学生が上位30名の8割以上を占める状況であったが、後半には他中からの入学生も努力を重ね、3割程度まで上位に食い込むことができた。また全体としての学習到達ゾーンにおけるSゾーン該当者数も伸びており、「切磋琢磨」を感じられる部分が見られた。また中高連携係を中心として、生徒の意識調査や部活動早期入部の調査など、生徒の意識を教員が共有する取組も進めることができた。
 - (2) 「中高のインタラクティブな関係形成の推進」については、昨年通り、中学2年生保護者に、普通科、理数科のプレゼンを行い、2月には、生徒がそれぞれの授業や課題研究の様子を見学する時間を設けた。また、今年度は、高校1年次生が現在の様子や高校生になるために中学時代に準備することなどを中学3年生に話をする時間を準備したり、中学3年生と高校2年次生の課題研究発表会を同日に実施し、生徒が交流することで取組を共有する時間をつくることができた。今後に必要なことを検討しながら中高連携を推進していきたい。

- 5 「働き方改革の推進」について、項目ごとにまとめた。
- (1) 「業務内容の見直し検討」として、13項目が挙げられ、その是非について検討してきた。内容によっては、削減予定であったが、必要に応じて実施したことで見直しにつながらなかった例もあるが、今後も積極的に検討し、次年度に向けても検討を続けていく。また可能なものは、次年度を待つことなく進めることで共有することができた。
 - (2) 「教員以外の顔を大切にす意識の醸成」については、個人的な差異はあるが、経験値の高い教員ほど休暇や勤務の振替をうまく活用できている様子が窺える。逆に経験値の低い教員も生徒のために集中して業務に取り組む様子も見受けられるので、徐々に最適な方法を身に付けていけるように感じた。今後の様子を注視して、必要な声掛けを進めていきたい。
 - (3) 「時間外勤務前年度比10%減」については、6月・7月・9月には、昨年比10%減を超える数値で推移していたが、11月以降、厳しい状況となった。年度当初のポスター掲示やプレミアムフライデーでの声掛け、また勤務割振り変更の声掛けなど昨年度同様に実施してきたが、1月末平均で昨年比4%減にとどまった。ただ、先生方の意識の中にも帰れるときには帰ろうという意識も高まっているように感じるので、今後も必要な声掛けをしながら時間外勤務縮減に繋げていきたい。

B 学校関係者評価委員名

河合保生（ノートルダム清心女子大学 文学部現代社会学科教授） 山下真一（元鏡野中学校長）
 大土井亮輔（建設設計会社経営 県民生委員自動委員会主任児童委員）
 森 尚美（本校PTA顧問 津山市教育委員） 阿形国明（津山高校保護者）
 飯綱浩二（津山中学保護者）

C 学校関係者評価

今年度の経営目標達成に向けての取組等について、内容と成果・課題を説明し、次のような意見・提言・評価をいただいた。

- (1) 今年度、津山中学の卒業生が高校1年次に入学した年であった。進学生の上位者層に占める割合は高いようであったが、後半には他中学からの入学生も徐々に上昇してきているようである。今後も追跡をしてもらいながら、教育体制を検討してもらいたい。上位だけでなく中位・下位への手立てなど具体的な取組は習熟度などで実施しているようだが、これらについても検証していつてもらいたい。
- (2) 中学校の学力推移調査でもGTZを共通項として確認しているようである。高校でもこれらの推移に注目し、今後の検証をしてもらいたい。
- (3) 津山中学の教育は質の高いものが実施されていると感じている。一方、受験勉強がない中で津山高校に進学するためのモチベーションが維持できるのかを少し心配している。現在も中学校では、高校の授業を見せたり、課題研究等の発表会で交流させる機会を設けたりしているようだが、今後も大学入試が目標ではなく、社会で求められる人材育成を目標として意識的に指導していつてもらいたい。
- (4) 朝読書は短時間でも大切であると感じる。また書いてまとめるなどアウトプットすることも大切であると感じている。この辺りも検討してもらいたい。
- (5) 課題研究の外部コンテスト等で入賞者が減っていることについては、他校の実施状況も関連すると思われるのでこの辺りも検証し、改善につなげて欲しい。
- (6) 1年次生〔融合学年〕の英語の発表（Skit発表会）を見学したが、本当に温かい雰囲気で行われていることに感激した。生徒は生き生きとお互いの発表を見合いながら学べるのはいいことである。

D 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

来年度は、融合2年目の年である。今年度の取組を検証しつつ、今まで積み上げてきた様々な手立てを手掛かりに、生徒たちに思考力や主体性をはぐくむ事業を展開していく。これらにより本校の使命である地域の教育をリードする活力と魅力あふれる学校づくりに努める。さらに広く未来社会や地域社会に貢献する人間の育成を進めるため、授業において、「思考力」「発信力」「主体性」を伸ばす取組を今年度以上に学校全体で組織的に推進する。またSSH事業も中間評価の年となる。守るのではなく今まで通りの挑戦する姿勢を大切にして、自然科学研究をリードするグローバル人材育成を目指すとともに、本校の魅力継続に繋げていきたい。なお、教員の充実感・満足度の向上や負担感の削減のために、会議や行事の在り方について検討し、今後とも地域の方々、小・中学校関係者、保護者、関係機関等の要望・意見に謙虚に傾聴し、教育の環境や内容の改善と充実を目指し、魅力ある学校経営に努めたい。